

不埒な社長と熱い一夜を過ごしたら、 溺愛沼に堕とされました

加地アヤメ

Ayame Kaji



Eternity
BUNKO

目次

不埒な社長と熱い一夜を過ごしたら、

溺愛沼に墮とされました

5

書き下ろし番外編

元不埒な社長と結婚したら、

甘い新婚生活が始まりました

311

不埒な社長と熱い一夜を過ごしたら、

溺愛沼に堕とされました

一

「ホテル行かない？」

取引先の人と、仕事終わりになんとなく一緒に食事でもどうですか、なんて話になった。軽い気持ちで承諾し同僚と四人で楽しく食事をしたあとに、まさかこんなお誘いが待っているとは夢にも思わなかった。

現在の時刻は夜の九時。取引先の男性と二人で、最寄り駅に向かっていく最中である。「え……？」

真っ先に冗談だと思った。でも、隣にいる人から嘘ですとか、冗談です、という言葉がいつまで経っても出てこないことにだんだん疑問を抱き、当の本人を見上げる。

仕事で最近何かと顔を合わせるこの多いこの男性は、名を八子諄やこじゆんという。

七センチヒールのパンプスを履いた百六十五センチの私よりも十センチ以上背が高いうえに、憎らしいほど整った顔をしたイケメンだ。そんな人が、私をホテルに誘っている？

——いや、ないでしょ。

「八子さん、ふざけてます？」

「ふざけてないよ。超真剣」

真剣と言うわりには、満面の笑みを浮かべている。表情からはまったく真剣さが伝わってこない。

私は必死に記憶を辿り、こんな風に誘われる原因を探した。

酒だ。そう、この人も私も、さっきまでアルコールを摂取していた。

「……八子さん、さっきビール飲んでましたよね？」

「うん、まあ、飲んだね。でもちよつとだけだよ」

少し乱れた前髪を手で掻き上げながら、八子さんが微笑む。

私は知っている。この微笑みにハートを撃ち抜かれた女性が何人もいるということを。そして今、垂れ気味の優しい目と甘い美声に、私も心を撃ち抜かれそうになる。でもそこはアラサーの経験値でぐっと堪えた。

「やつぱり酔ってるんじゃないですか。もう……送ってくれなくていいですから、早くタクシーを拾って……」

駅までまだ距離があるが、視界の先にタクシー乗り場が見える。八子さんから視線を外してそっちを見ていたら、なぜか腕を掴まれた。

「えっ?」

「確かに酒の力は借りたけど、君を誘ったのは酒の勢いじゃない」

私の目を真つ直ぐ見つめながら言った彼の言葉が、妙に胸に響いた。

腕を掴んでいた大きな手が、するすると移動して手に触れる。そのまま指を絡めるように握られて、ティーンのように胸がきゅんとした。

こんな感覚は何年ぶりだろう。

——これって……………求められている……………!?

初めての彼氏と初めてキスをした時のような、甘酸っぱいときめき。数年ぶりとも思えるその感覚が、どこからともなく湧き上がってくるのを感じた。

八子さんのことはもちろん嫌いじゃない。でも、恋愛感情を抱いているかと聞かれたら、現段階では抱いていないと自信を持って言える。だけど、久しぶりに男性に、しかも八子さんみたいな規格外のイケメンから女として求められるのは、正直言ってイヤじゃない。むしろ……

——やばい、嬉しい……

忘れかけていた女性としての本能が、一気に噴き出してくるようだ。

「ダメかな」

八子さんが体を屈めて、私の顔を覗き込んできた。その瞬間、ハッとする。

求められるのは嬉しい。でも、付き合ってもいない男性といきなり一線を越えるのは、さすがにためらいが湧く。

「いやあの、でも……」

——だって、相手は取引先の人で、これからも付き合いがあつて……

返事に困っていると、彼の顔が近づいてきて、いつの間にか唇が触れ合っていた。

「…………!!」

声を出そうとしたけれど、思いのほかキスが気持ちよくてうっとりしてしまふ。

——ダメだ、蕩ける……………こんなの久しぶり……

腰から下に力が入らない。彼に支えられていなかったら、たぶん、地面に座り込んでいたと思う。

しばらくして、ゆっくり唇が離れていき、腰を抱かれたまま至近距離で見つめ合う。

「…………行く?」

ぼーっとした状態の私は、無意識のうちに頷いていた。その結果、八子さんに駅近くのホテルへ連れて行かれた。

エレベーターで客室フロアに移動する間、心のどこかで何をやっているのだろうと何度も自問自答した。

——私、今からとんでもないことしようとしてる? でも、彼氏もいないし三十だし。

こんなことくらい、別に……

そんな風に強引に理由をつけて、自分の行動を納得しようとする。

——きつと疲れてるんだ。だから……溜まつてるんだよ、きつと。性欲というものが、ね。八子さんは移動している間、一言も発さず、客室に到着すると無言のままドアを開けた。

「どうぞ」

先に部屋の中へ入るよう促される。意を決して部屋の奥に進むと、大きな窓が視界に入った。カーテンを閉めていない窓から、夜景がよく見える。

「わ……すごい」

夜景が綺麗ですね、なんてテンプレな会話を交わすこともなく、背後からいきなり抱き締められて唇を塞がれた。しかも、さつきより濃厚なやつを。

キスの最中、彼は器用に片手ずつジャケットの袖から腕を抜き、窓辺にある一人掛けのソファ一めがけて放り投げた。

舌を絡ませ吸われて、ちよつと苦しくなつて顔を後ろに下げようすると、更にグツと前のめりになつて迫ってくる。逃げ場がない。

道端でしたキスとは全然違う。大人の男の本気のキスに、立ったまま応えている私の腰はいつまでもつのか。

「ちよ……ちよつと待って、シャワーとか……」

顔を背けて訴えたが、すぐに八子さんの唇が追いかけてくる。

「いいよ。どうせすぐに汗でぐちゃぐちゃになる」

「ん……!!」

キスをしながら部屋を進んだ私達は、ダブルサイズのベッドの上に絡み合つたまま倒れ込んだ。

「……っ、は……」

互いの顔を手で挟み、激しいキスの応酬。うつすら目を開けると、長い睫に覆われた綺麗なアーモンドアイがあった。

——やっぱり、この人の目って綺麗……

仕事でこの人の顔を見る度に、つくづくいい男だと思っていた。しかも大手のデザイン事務所から独立後、自分で会社を経営しながら空間デザイナーとして名を馳せている。分かります言つて出来る男。

そんな人と、今こうしてベッドで絡み合っている状況がまだ信じられない。

——夢かな？ まあ、夢だったとしてもいいか。

なんせ、仕事に夢中になるあまり恋愛を完全に置き去りにして数年。男性との艶事をご無沙汰すぎて、今の私は気持ち的には完全にティーン。

でも、どっちかというに興味の対象はセックスだったかもしれない。

服を剥ぎ取るように脱がされ、ブラジャーのホックを外す手際は高速。はやつ、と感心する間もなく、彼の眼前にまろび出た乳房にむしゃぶりつかれた。その余裕のない様子が可愛く見えて、ちよつとだけほっこりする。

——八子さんが可愛い……

なんて思っていたら乳首を軽く甘噛みされて「あっ!!」と声が出た。それに反応して一瞬だけ顔を上げた八子さんは、ひどく嬉しそうに見えた。

「可愛いなあ鳥梯さん。こうされるの気持ちいいの?」

「……っし、知りません……」

本当は気持ちいいけど、取えてうんとは言わない。でも、私のそんな態度も相手にとっではツボだったらしい。

「素直じゃないともいいね。でも、こっちはどうかな」

そう言いつつ、八子さんの手がショーツのクロッチ部分をなぞってくる。

「んっ……」

たまらず腰を揺らしたら、彼の指がピンポイントに気持ちいいところを攻めてきた。

「ここがいいんでしょ? もうびしょびしょじゃん」

「~~~~~っ!!」

そんなこと自分でも分かっている。

「やだもう、言わないで……」

「濡れてるのが恥ずかしいんだ? でも、そうやって恥ずかしがるのは余計男を喜ばすだけだから」

八子さんが白いシャツの前ボタンを数個外し、下に着ていたTシャツと一緒に頭から脱ぎ去った。そして、ぐっと体を屈めて顔を近づけてくる。

「俺の前以外で言っちゃダメだよ」

また唇を塞がれ、彼の大きな手で乳房を捏ねられる。その間も股間への愛撫は続いているが、彼はその長い指を私の中に挿れようとはしなかった。

それがだんだんもどかしくなってきた、我慢が限界に近づいていく。

「……何? なんか言いたいのか?」

至近距離で顔を合わせながら、八子さんが尋ねてくる。

今、私ってどんな顔をしているのだろう。

「……………八子さん、意地悪ですね……」

「そう? 言いたいことがあるなら、上手におねだりしてごらん」

おねだり。人生でおねだりなどしたことがないこの私が、おねだり。

——この人……本当にずるい……

でも、この状況では抗えない。私のちっぽけなプライドなど、この人の前では無意味だ。

「……く、ください……」
「何を？」

分かつているくせに言わせようとする、その態度にちよつとだけムツとした。
「や……八子さんが欲しいの……だから、ください……!!」

「よくできました」

クスツと笑った八子さんは体を起こすと、一旦私から離れて出入り口に向かった。部屋に入つてすぐ床に置いた鞆から何かを持って戻ってくると、手早く穿いていたパンツを脱いで下半身を露わにした。

余分な肉はついていないけれど、つくべきところにはちゃんと筋肉がある鍛えられた体。思わず見惚れていると、彼が避妊具をつけ終え覆い被さってきた。

「鳥梯さんにそんなこと言われたら、もう遠慮とかできないけど。いい？」

ピタ、と股間に硬い屹立を宛がいながら、八子さんがお伺いを立ててくる。

「し……しなくていいです」

「そう？　じゃあ」

遠慮なく、と彼が私の中に入ってきた。数年ぶりに下腹部を埋めていく圧倒的な感覚に、息を吞まずにはいられなかった。

「あ、あああつ……!!」

「狭いね。久しぶりだった？」

この問いには答えなかった。すると、八子さんがクスツとする。

「まあ、どっちだっていいや。今俺とこうしてるんだし」

ぐっと腰を入れ、彼が私の最奥に辿りつく。全部入ったよ、と言いながら彼が私の背中に手を添え、上体を起こされる。

彼に抱つこされた状態で顔を合わせる。目の前の八子さんの表情は、仕事の時とは違って、甘く、どこか恍惚としていて、危うく見惚れそうになった。

「……名前。真白だっけ？」

「はあ……」

「じゃあ、今は真白って呼ぶ」

「ん……あつ!!」

気を抜いていたら下から突き上げられて、たまらず大きな声が出てしまった。

「ふっ……真白可愛い」

これに気を良くしたのか、八子さんの腰の動きが激しさを増す。彼が腰を浮かす度に、奥を穿たれて、甘い痺れが全身に伝わっていった。

——ふ、ふか……!! この体勢だと、奥に当たって……!

何年かぶりのセックスというだけで興奮はしていたけれど、そもそもセックスってこ

んなに気持ちいいものだったっけ。

自分の記憶では、挿入で達する以外はそこまで気持ちいいと思ったことがなかった。でも、これは、明らかに今まで経験したセックスとは違う。

キスから愛撫^{あいぶ}まで、すごくすごく気持ちがいい。

「あつ……や、やば……、い……い、っちゃう……」

気が付いたら自分も体を上下に揺らし、快楽を求めている。

「はっ……、真白……」

いつの間にか、彼が仰向けになり私が上になる、いわゆる騎乗位の体勢になるほど、情事にのめり込んでいる自分がいた。

目を閉じていると、無意識のうちに口から漏れる自分の声の他に、これまで聞いたことがないような八子さんの艶^{つや}っぽい声が聞こえてくる。それが余計、私の欲情を煽^{あお}った。「んっ……は、ああつ……!! い、くうっ……!!」

——まさかこの私が、取引先の人とワンナイトラブなんて……!

頭の片隅には常にこの言葉があった。でも、完全に気持ちよさに負け、抗^{あらが}うどころか我を忘れるほど、夢中になってしまった。

でも後悔はしていない。だって、すごく気持ちよかったから。

鳥梯真白、三十歳。社会人になってからも何人か彼氏はいたけれど、みんな長くは続

かず今は一人身。そんな私が、ここ数年忘れかけていた女の本能というものを、八子さんによって呼び覚まされるなんて、夢にも思わなかった。

——いたた……やつぱりこうなったか……

翌朝、私は痛む腰を擦りながら会社までの道のりを歩いていた。

ヤバいかなと思っていただけど、あまりの腰の痛さに、今日はいつものカツカツと軽快な音を立てる七センチヒールをお休みし、歩くのがとても楽なバレエシューズだ。

ついでに服装もスカートではなく足首までのテーパードパンツにして、肩甲骨辺りまで伸びたストレートロングの髪は結わずに下ろしている。

というか、本当は髪を結ぶつもりだったのに、首筋にどう見てもキスマークにしか見えない赤い痣^{あざ}を発見してしまい、急遽^{きょとん}結ぶのをやめたのだ。

——やつ……八子——!! あの人どこに痕^{あと}つけてくれたんの!?

もちろん本人には言えないので、家で叫ぶだけにとどめたが。

確かにあの最中、何度か首筋に吸い付かれた記憶はある。それに、私も気持ちが高ぶっていたせいで、事後のことまで考える余裕がなかった。

——もう……痕^{あと}が綺麗に消えるまで髪上げられないよ……

ため息をつきながら昨夜のことを思い返す。

まさかあんなに激しく何回も抱かれるとは思わなかった。

覚えてはいるだけでも、三回はしたような気がする。十代かあの人は。

久しぶりの情事に私の腰が先にやられてしまい、最後は「もう無理です!」とこちらから泣きを入れて勘弁してもらった。

——もし私が止めなかったら、あのまま続けてたってことなのかしら。八子さん、恐るべし……

昨夜のことは、思い出すだけでドキドキして、いろんな意味で心臓が痛くなる。

最初はワシナイトラブなんて、とんでもないことをしてしまったと思った。

でも、帰宅してお風呂に浸かりながら、彼との情事を思い返したら、その考えが変わった。

——すごく気持ちよかった……あれが、本来のセックスというものののかな……?

もちろんセックスの経験はある。でも昨夜のように、我を忘れて情事にのめり込むような濃厚なセックスは初めてだった。

ちゃんと相手が気持ちいいかを確認しながら、お互いに気持ちよくなる行為。それをもつて体感できた、ある意味貴重な経験だった。

時間をかけて丁寧^{あいぶ}に愛撫^{あいぶ}してくれた八子さんには、感謝してもいいくらいではないか。でも、たぶん二度目はないだろうけど。

ちょうどそこで、職場に到着した。十五階建てのビルは、一、二階に商業テナントが入っていて、三階から上がビジネスフロアになっている。

一階にはカフェやスイーツショップ、二階には雑貨店やコスメショップなどが入っているこのビルの三階に、私の勤務先がある。二階まではフロア中央にあるエスカレーターを使い、三階までは階段を使って移動するのがいつもの私の通勤ルート。

勤務先に到着し、いつものように真っ直ぐ自分の席へ向かう。

打ち合わせなどに使う仕切りで区切られたブースの前を通り、社員達の机が並ぶゾーンを抜けた先に私の席がある。

株式会社K.W.Y.^{ケーエフエーワイ}。元々は一軒家を使ったカフェを都内で営んでいたのが、当時のオーナー夫妻の息子である現在の社長が、事業を拡大してできた会社だ。今や元のカフェの他に、都内で業務形態の異なるカフェを十数店舗展開するまでに成長した。

数年前に一般事務用品メーカーからの転職でこの会社に入った私は、一年ほど前から新店舗開発を担当する部署に異動して、忙しくも充実した日々を送っている。

「おはようございます」

同僚に声をかけながら席に着くと、自然に仕事モードへ気持ち切り替わる。

「鳥梯さん、おはようございます」

早速私のところに来たのは、二年後輩の井口^{いぐち}さんという女性社員だ。彼女は年下とは

思えないほどの冷静さと落ち着きを持った女性で、私が今の職に就いてからずっとサポート役をしてくれている。そのため、仕事場では彼女と一緒に過ごすことが多い。昨夜の食事も彼女と一緒にだったのだが、帰る方向の違う彼女とは店の前で別れた。よって、彼女は私と八子さんがあのあとホテルに行ったなどとは露ほども思っていないはず。

「井口さん、おはよう。昨日はちゃんと家に帰れた？」

私や八子さんだけでなく、井口さんもいい感じに酒量が増えていた。彼女は方向が同じという八子さんの部下の男性と一緒に帰っていたが、まさか私みたいなことになってはいまいか。

すると、顎で切り揃えられた綺麗なストレートボブを揺らしながら、井口さんが口元を緩ませた。

「当たり前じゃないですか。駅まで送っていただいて、そこから一人で電車に乗って帰りましたよ。鳥梯さんこそ相変わらずの酒豪ぶりでしたけど、あのあとまさか別の店に行つて八子さんを潰したりしてないですよね？」

なぜ、八子さんに潰されたではなく、私が潰した体で話をしているのだろう。

「そんなことしてないって。ちゃんとあのあと駅からタクシーで帰りました」
嘘だけだ。情事を終えてからの駅からタクシーだったけど。

しれつと嘘をつく。もちろん井口さんはそれが嘘とは思わないだろう。

「よかったです。ほら、八子さんって鳥梯さんのことお気に入りみたいですし、今後のためにも優しくしてあげた方がいいのかなって、思いました」

どうやら彼女の目には、八子さんが私を気に入っているように見えているみたいで、少し前からちよくちよくこういったことを言ってくる。

一体どこでそう思ったのだろう？ 私はあんなことになって驚いてるのに。

「だ……大丈夫よ。ちゃんと承知してます」

「本当ですか？ 鳥梯さんは仕事に夢中になるとあんまり周りが見えてないから、私としては心配なんですよね」

「そんな……ため息つきながら言わないでよ」

もうどっちが上司でどっちが部下なのか分からなくなってくる。

「それよりも、八子さんから早速内装デザイン案が送られてきてましたよ」

「え。もう？」

早すぎない？ と目を丸くする私に、井口さんがデータをプリントアウトしたものを差し出した。

「どれも甲乙つけがたいです。さすが八子さんですね」

「……そうね、本当にクオリティが高いうえに仕事が早いわ」

渡されたデザインを確認しながら、感嘆のため息を漏らさずにはいられなかった。

——昨夜、私とあんなことをしたあと、普通に仕事したってこと？ 恐るべし……

八子諄という男は、YAKOデザインオフィスという空間デザインの会社の社長兼空間デザイナーだ。彼は以前から我が社の社長と懇意にしており、二号店として業務形態の異なるカフェを出店した時から内装デザインを担当しているのだ。

元々は住宅街にある落ち着いた内装の一軒家カフェ。そこから都市部に進出し駅などにカフェスタンドを出店したり、ショッピングモールに家族連れをターゲットにした軽食の食べられるカフェを出店するなど、我が社はここ数年でかなり業務を拡大した。そのほとんどに八子さんが関わっている。

かくいう今回も、新しいコワーキングスペース兼カフェを出店することになり、内装デザインを八子さんをお願いすることになった。その新規事業の責任者になったのが私である。

昨日の食事は新規案件の担当者として関係者を招き、挨拶を兼ねたいわゆる顔合わせの場だった。それなのに、なぜあんなことになってしまったのか。

彼とは以前にも何度か仕事で顔を合わせているが、当時の私は前任の責任者のサポート役だったので、八子さんと直接話をする機会はほとんどなかった。

もちろん、たまに話を振られることはあったけれど、当たり障りのない会話しかしな

かったと思う。現に、その時、何を話したかまったく記憶になかった。

「じゃ、早速ミーティングして、デザインを検討しましょうか」

新規事業を担当する社員を集めて専用ブースに移動し、大きなテーブルに図案を広げた。

一つは白を基調としたシンプルな空間、もう一つはダークブラウンを基調とした落ち着いた空間。最後に木材を多用した温かみのある空間だ。

本当にどの案もそれぞれ素晴らしくて、なかなか意見がまとまらない。それだけ、八子さんのデザインが優れているということだ。

ひとまずコスト面のことを考え、二案に絞った。それを社長も参加する会議に出し、最終的に決定することになる。

ミーティングを終えて席に着きながら、昨夜のことをしみじみ考える。

ここ五年は気楽なお一人様街道まっしぐらな生活だった。一人は慣れると本当に楽だし、彼氏に振り回されることもない。この生活にどっぷり浸かって以来、恋愛が面倒になっっているのは否めない。

そんな私に、昨夜のような大事件が起こるなんて、誰が予想できただろう。

——自分でもびっくりだし。

八子さんのことは嫌いじゃない。イケメンだし、体は細マッチョでむしろ好みで眼福

だった。

仕事の評判もいいし、若くして会社の社長なんかしちゃってるし。そのうえ床上手。そんな人と自分が、まさかああいうことになるなんて、今でも信じられないし、夢だったのではないかと疑ってしまう。

いっそ、ここ数年恋愛もせず仕事を頑張ってきた私に、神様がご褒美^{ほうび}をくれたと言われた方が納得できるくらい、あり得ないことだった。

今回のことはあまりにも大きな出来事すぎて、私一人の胸の内に秘めておくことなんかできない。

そう思った私は、仕事終わりに学生時代からの付き合いである友人を呼び出した。

友人のマンションと私のマンションの中間点の駅近くにある馴染みの居酒屋。ボックス席で友人と向き合いながら、私は小声で昨夜の出来事を打ち明けた。

すると、友人、下山田文^{しもやまだあやくら}が堪えきれないとばかりに噴き出した。

「ぶはははは!! 真白がワンナイトとか、びっくりなんですけど」

「……笑いたきゃ笑うがいいわ……私だってびっくりしてんのよ。自分があんなことするなんて思いもしなかったし……」

白い目で見られるより、笑い飛ばされた方がどれだけいいか。親友の反応に、私はどこかホッとしていた。

文は大学卒業後、調理専門学校に入り、今は実家の洋食店を父親と共に切り盛りしている。文が作る洋食はなんだって美味しいが、特にオムライスが絶品だ。立ち寄る度にオムライスを選んでしまうくらい、惚れ込んでいる。

文が笑いを収めながら、私に向かって手のひらを向ける。

「いや、ごめん。まさか大学時代、頑^{かた}なに彼氏に体を許さなかったお堅い真白が、そんなことになって驚いちゃっただけ。いやあ……人って変わるものですね」

「う……。大学の時のことは言わないでよ……あれはあれで結構トラウマだったんだから」

大学時代はそもそもずっと恋人がおらず、四年生になって初めて彼氏ができた。でも、その彼氏が見るからにやる気満々で、何かにつけて私をホテルへ連れ込もうと躍起^{よろこ}になつていた。そんなことが続いたせいですっかり気持ちが冷め、すぐ別れてしまった。

そのことがあったせいで、次にできた彼氏とは卒業まで体の関係を持たないことを条件にお付き合いを決めた。でも、いざ卒業してそういう関係になっても、なぜか上手^{うま}くいかず、その彼とも長くは続かなかった。

「別にエッチが嫌いというわけじゃないのよ。なんていうのかなあ……してても気持ちいいのかがよく分からなくて」

「真白からそういう方面の話ってあんまり聞かなかったもんね。でも、今回の人はこれ

までと違ったってことなんでしょう？」

「そうなの！」

つい興奮して木製のテーブルを叩いて軽く身を乗り出した。それを見て、また文が笑う。
「そんなによかったの？」

「うん……もう、最初から違ってた。キスにとろーんてなっちゃって……気が付いたらホテルに入ってて。流されちゃいけないっていう考えは頭の片隅にあったんだけど、完全に雰囲気吞まれた……もちろん、それだけじゃないんだけど。相手のテクニクもすごかったし」

「なんかすごそうね……」

「すごかったわ……あんなの初めてだった。びっくりしちゃった」

一晩で何回も達するとか、気持ちよすぎて気を失いそうになるとか。経験が少ない自分には、とにかく驚くことばかりだった。

本当のセックスがこういうものなら、今まで自分がしてきたセックスはなんだったのか。

三十歳にして初めて知ることばかりで、なんだか一晩でものすごく自分がレベルアップしたような気持ちになった。

私が多くを語らなくても、ある程度は想像ができたのだろう。文がごくんと喉を鳴

らす。

「それはかなり……相手がやり手ね。顔は？ イケメンなの？」

「イケメンすぎるくらいだよ。しかもスタイルもいいし、仕事もできるし社長だし……なんか、ダメなところが見つからないパーフェクトな人なの」

「なんだその完璧超人みたいな男は……」

口をあぐりしたまま文が固まった。その手にはビールの中ジョッキが握られていて、自身はまだ半分ほど残っている。

ここはチェーン展開している居酒屋だ。席にはそれぞれ仕切りがあるものの、店内は人の話し声で溢^{あふ}れている。私達くらいの年齢の女性や、仕事帰りのサラリーマンが多いが、みんな、自分達の話に夢中で、こちらの会話は耳に入っていないだろう。だからこそこの会話なのだが。

「完璧超人みたいな人から誘われたから、思わずOKしちゃったのかも……」

「う、うん……まあ私も、もし、そんなすごい人に誘われたら断れるかどうか……好きになるんじゃないは別として、やっぱり興味があるかもしれない」

「イケメンは罪よ……」

女二人、しみじみと頷き合う。

「その人から連絡とかあったの？」

文がこちらに身を乗り出す。たぶん、その後の私達がどうなったのか気になるのだろう。

「ないよ」

「え。ないの？」

文の顔が一瞬強張った。

「ていうか私、携帯の番号を教えてないから」

そう言うと、今度は嘘でしょと言わんばかりに文の目が大きく見開かれる。

「なんで教えてないの!？」

「だって、仕事の連絡は会社にくるし。個人的な番号はそもそも聞かれてないし」

「えーっ！ その男、なんで番号聞いてこないかな!! 普通聞くでしょ……」

「きつと、あの人間にとっては遊びだったのよ。もちろん、私もそのつもりで誘いに乗っただけけど。お互いいい大人だし、あれは一夜限りの割り切った関係ということでのいいのよ」

「……いやあ……それだけで遊びだって判断するのはまだ早いんじゃないかしら、相手は真白のことが本気で好きなのかもしれないし」

「ないない!! そもそも、そんな人がいきなりホテル行こうとか言う? あり得ないでしょ」

笑って否定して、ビールを呷る。

「じゃあもし、あとから実は好きでした、俺と付き合ってください、とか言ってきたら付き合うの?」

つまみに頼んだ鶏もも串を手には、文が私の顔を窺ってくる。その顔には、実はその人のことが気になってるんじゃないの、と書いてある。

「いや、本当じゃないから」

彼と付き合うことを想像してみるが、私の中からときめきは生まれなかった。

——いやあ、ないでしょ。

何しろ八子さんは、普段から女性との距離が近い人だから。

思い返せば最初に会った時からそうだった。

『鳥梯さんていうの? 初めまして、八子です』

彼が売れっ子デザイナーとして名を馳せているのは知っていた。前評判ばかり耳にしていたせいで、イメージが一人歩きしていたところはあったかもしれない。だが、彼を前にした時、まずその容姿に目が釘付けになった。八子さんの顔はすこぶるイケメンだったのだ。芸能人と言ってもすんなり納得できるほど整った顔形と、全身から醸し出される独特なオーラに圧倒された。

でも八子さんは、まったく偉ぶる素振りもなく、前任者の横にいる私にいち早く気付き、向こうから声をかけてきてくれた。

最初は、下っ端の私にまで気を遣ってくれる八子さんに好感を持った。もしかしたら誠実そうな彼の微笑みに、ときめいていたのかもしれない。

しかし、彼に対する印象は、すぐに変わることになる。

彼の細やかな気遣いは、女性スタッフ全てに向けられているもので、自分が特別なわけではなかったのだ。

『えー、八子さん。私の誕生日覚えてくれたんですか!?』

『もちろん。千香ちゃんのことなんだから知ってるよ?』

やだあ!! と照れる女性と八子さんがじゃれ合っている。

内装業を営んでいる顔見知りの女性が誕生日だったらしく、誰より先に八子さんが祝っているのを目撃した。私もその女性とは数回顔を合わせたことがあるが、さすがに誕生日までは知らなかった。しかも、名前で呼んでるし。

——八子さん、業者さんの誕生日も覚えてるんだ……すごい。

それともこの女性が特別なのでは……と考えている最中、別の女性が八子さんに近づいてきた。

『八子さんママだもんねー。私の誕生日の時も現場に私の好きなガトーショコラ買って

きてくれたし。私が好きだって言ってたの、覚えてくれたんですね?』

『そう。俺、めちゃくちゃ記憶力いいんで。というか、あれだけ何度も言われたらイヤでも覚えるでしょ』

女性に囲まれている八子さんを遠くから眺めながら、彼が親切にするのは私だけじゃない、他の女性にも同じように、もしくはそれ以上に親しく接しているのだと知った。

そう思って眺めていると、八子さんはとにかく女性との距離が近い。

『笠井さんの今日の服いいね』

『あつ、依田さん!! この前もらったお菓子すごく美味しかった。いつもありがとね』

うちの会社に打ち合わせで来た時、顔見知りの社員が通りかかると、八子さんは積極的に声をかけていた。もちろん男性社員にも声はかけるが、私が見る限り圧倒的に女性が多い。中には会話の流れで八子さんを食事に誘っている人もいた。そういう時、彼は一緒に何人か誘って飲みに行ったりしていたと思う。

そういった光景を何度も見ているうちに、勝手に私の中で八子さんのイメージができあがってしまったのだ。

この人は、チャライ、と。

「あのの人にとって女性をホテルに誘うなんて、きっとよくあることなのよ。お互いい年だし、割り切って楽しましようっていう……その場の流れみたいなのなんじゃない

い？」

女性に優しくするのは八子さんの癖というか、元々持っている性格的なもので、特別な意味などないと私なりに理解しているのだ。

「ええ。だからって、気持ちもなく仕事先の女性を口説くようなことしないでしよう？ 一応社長なんだし、手当たり次第に取引先の女に手を出したら、仕事がやりにくくなりそうじゃない」

「そんなものかな……お互いに割り切つてれば、そういうこともあるんじゃない？」

さっきまではセックスがよかったと興奮気味だったのに、付き合うことには後ろ向き。そんな私を、文が頬杖をつきながら眺めている。

「もし相手にとつて、あんたが本命だったらどうすんねん……」

「いや、それは絶対ないから」

ワンナイトから始まる恋なんて無理。いきなり告白とかの経緯をすつとばして体を求めてくるような男と恋人になるとか、私には考えられない。まして相手が、常に周囲に女性がわんさかいそうな八子さんだなんて、ないでしょう。

——ワンナイトだけに一晩で終わり。それでいいじゃない。

あんなことになってしまったせいで、次に彼に会うのが少しだけ気まずいのは確かだけれど、ここは一つ、大人の対応でやり過ごそう。

なんせ自分から仕事を取ったら何も残らないのだから。

二

友人に話すことによつて、自分の行動に落としどころをつけた私は、まるであの夜、何もなかったかのように仕事をこなしていた。

そして、あの夜から数日後、来るべき時を迎えた。

——あー……そうだった、今日、八子さんが来る日だ……

さすがに、あの夜以来の直接対面となると、若干の気まずさはある。でも、気にするほどのことはないのかも。

そもそも、相手は私よりも社会人経験の長い大人だし、わざわざ周囲に関係を怪しまれるような言動はしないだろう。

そんなことを考えながら、私は手早く濃すぎず薄すぎないナチュラルなメイクを施していく。それが終わったら、次は髪セットだ。慣れた動きで髪を上げると、あの夜八子さんにつけられた痕が、ほとんど目立たなくなっていることに気が付いた。

なかなか消えなくて、ここしばらくはずっと髪を下ろして通勤していたのだが、よう

やく分からないくらいまで薄くなった。

——よかった、消えてきた。

なんとなく、これであの夜のことがリセットできたような気になって、少しホッとする。同時に、ほんの少しだけ残念だと思う自分もいた。

——ま、いいか。とにかく気持ちを切り替えて、仕事行こつと。

耳のラインで髪をシュシュで一つ結びにして、垂れ下がるタイプのピアスをつけたら、準備は完了。

よし、行くぞ、と自分に気合を入れて部屋を出た。

出社して、いつものようにメールのチェックと、返信、新店候補地の不動産チェックなどを片付けているうちに、八子さんとの打ち合わせの時間が近づいてきた。頭はすっかり仕事モードに切り替わっていて、今日やることを順序立てて整理する。

この前もらった内装デザイン案は、社長がいたく気に入ったダークブラウンの案を採用することになった。そこにこちらの要望をいくつか入れてアレンジをお願いする、というのが今日の打ち合わせの目的だ。

約束の時間前にミーティングルームに行き、まずは資料の用意。それから予め用意しておいた小さいお茶のペットボトルを人数分テーブルに並べる。黙々とミーティングの準備をしていると、開始までにはまだ時間があるにもかかわらず、部屋のドアが開く音

がした。

たぶん、井口さんが来たのだろう。勝手にそう思い込んだ私は、まったく疑わず「井口さん？」とドアの方も見ずに声をかけた。

「八子です」

「えっ!？」

慌てて振り返ると、白いシャツと黒いスラックス姿の八子さんが、ドアから入ってすぐのところで口元を押さえている。明らかに、驚く私を見て笑っているのだ、これは。

「何その、熊でも見たかのような顔」

「……す、すみません……」

「まあ、分かんなくてもいいけど」

八子さんがスタスタと私に近づいてくる。彼が距離を詰める度に、私の心臓がどくどくと鼓動を速めた。

何度も呪文のように平常心、平常心……と心の中で呟く。私達はもういい年をした大人だ。あんなのはたいしたことじゃない。いつもどおりでいいはず。

「体、大丈夫だった?」

「へ?」

「いや、だから体。俺、相当無理させた自覚あるんで」

「……腰は……痛かったです……」

まさか体を氣遣われるとは思わなかった。拍子^{ひょうし}抜けして本音を漏らしてしまう。

「うわ、ごめん」

八子さんが本気で申し訳なさそうな顔をする。この人がこんな顔をするのを初めて見たかもしれない。

「それなら一言、恨み言でもいいから連絡くれればよかったのに。俺、携帯番号が入った名刺渡してあったよな？」

「……それは、会社の名刺ファイルに入れてしまったので、手元にはありません」

これも正直に話したら、今度はなぜか、ははっ、と苦笑された。

「じゃあもう一枚あげるよ。これは鳥梯さんが持ってた」

言いながら、スラックスのポケットから取り出した財布から名刺を引き抜き、私の前に掲げた。

「えっと……あの……なぜ……？」

「なぜって、俺と個人的にいつでも連絡がとれるように。ほら」

受け取れよ、と言わんばかりに八子さんが名刺を私の顔に近づけてくる。仕方なくその名刺をもらい、自分の席に置いた。

「それより、鳥梯さんの連絡先、俺まだ教えてもらってないんだけど」

「連絡、先……？」

何を言われているのかが分からない。

私が無言で床を指さすと、咄^{つと}嗟に八子さんが真顔で「違う」と否定した。

「会社じゃなくて、鳥梯さん個人の連絡先。俺、何度も聞いたんだけど、君、全然教えてくれなかったよね」

「え。私？ そんなこと聞かれましたっけ。いつの話ですかそれ」

本気で聞かれた記憶がない。驚く私を見て、八子さんは呆れ顔だ。

「いつって……あの夜何回か聞こうとしたけど、その度に鳥梯さん全部に言葉被せてきたでしょ。意図的にやってるのかと思ってたけど、もしかして無自覚……？」

「ちょ、ちょっと待ってください。思い出します」

八子さんの会話を遮^{さへき}って、あの夜のことを思い出す。八子さんと会話らしい会話をしたのは、ことを終えてホテルのエントランスからタクシーに乗り込む時くらいだと思うのだが。

「……あ」

断片的にだが、ちよつとずつ記憶が蘇^{よみがえ}ってきた。確かベッドでぐったりしている時、隣にいた八子さんが、そんなようなことを言っていた気がする。

『鳥梯さん、れんら……』

『あーっ!! もうこんな時間!? すみません、私、帰らないと』
 そこから急いで下着をつけている間、ほとんど八子さんの言葉は頭に入らなかった。
 たぶん、一回目はそこだ。

二回目は、ホテルの部屋を出てタクシー乗り場に向かう時だ。エレベーターの中で、話しかけられた記憶がある。

『鳥梯さん、さっき聞きそびれたんだけど……』

『えっ!? あ、ごめんなさい、ホテル代ですね! 私の分はもちろんお支払いしますので』

『いや、そうじゃなくて……代金はいいいよ』

『えっ。ダメですよそんな! ちゃんとお支払いします』

『本当にいいって』

払います、いらぬ。の押し問答が続き、エレベーターの扉が開くと八子さんは私から離れ先にフロントに行き、代金を精算してしまった。

そんなやりとりをしたことを、おぼろげながら思い出した。

——ああああ、聞かれてた……!

無言のまま八子さんを見たら、ちよつとだけ笑われた。

『思い出したか。まったく……それにしても鳥梯さん、なんでそんなにクールなの? こう見えて俺、結構傷ついてるんだけど』

八子さんの口から傷つくなんて言葉が出て、びっくりした。

『八子さんが傷つく……!? そんなことってあるんですか?』

『あるさ。二応普通の人間なんだ。……あ、もう時間だな。打ち合わせ、あと何人来るの?』
 話の途中で八子さんがプライベートモードからビジネスモードに切り替わった。それに伴って、私も背筋を伸ばす。

『はい。あと三人来ます』

『分かった。俺の席どこ?』

こちらです、と手で示すと、彼がその席へ移動した。

『飲み物はお茶でよろしいですか?』

『あー、できれば水がいいかな。なければお茶でもいいよ』

『はい、じゃあ今……』

水を取りに行こうと背中を向けたタイミングで、腕を掴まれた。えっ、と思う間もなく、じつと私を見ている八子さんと目が合う。

……いや。彼の視線は私の首筋だ。

『なん、なんですかいきなり』

首筋を見ていた八子さんが、私を見て口角をくつと上げた。

『痕、綺麗に消えちゃったね? せっかくつけたのに』

「……!!」

咄嗟に彼の手を振り払い、そのまま首を隠す。いけないとは思いつつ、つい八子さんを睨んでしまった。

「か……からかうの、やめてください!」

「からかってないけど」

真顔で返してくる八子さんの真意が分からない。もやもやした気持ちのまま、私は水を取りにミーティングルームの外に出た。

——な……なんなの……!? 今日の八子さん、いつもと違いすぎない……?

いつもの軽い感じでこの前はごめんね? とか言ってくると思っていたのに、予想と全然違うから調子が狂う。

動揺を払いのけながら、私は水を取りに冷蔵庫へ向かうのだった。

その後の打ち合わせは、スムーズに進んだ。

基本となる案にこちらからの要望をいくつか伝えると、それならこうするのはどうですか? なんて、八子さんから更に斬新な提案なんかもあり、予想よりもはるかに素晴らしい図案ができあがった。再度社長のチェックは必要になるが、新規出店を担当するスタッフは全員満足しているようだ。

「八子さん、ありがとうございます。あの図案、きつと社長も喜ぶと思います」

パソコンを閉じ、ケースに収めながら八子さんが微笑む。

「いやー、岩淵さんは厳しいからなー。こっちが予想してないところでダメ出しされたりとか、過去に何度も経験あるんで、安心しないようにします」

八子さんが立ち上がり、ミーティングルームを出る。それを、うちのスタッフ三人がドアの外で見送っている。

責任者の私は社屋のエントランスまでお見送りするため、八子さんのあとに続いた。

「今日のご足労いただきありがとうございます。近いうちにまたご連絡を……」

「鳥梯さん」

ビジネストークで間を繋げていた私の話をぶった切り、八子さんがこちらを見る。やけに真剣な顔だったので、ビジネストークが吹っ飛んでしまった。

「はい……?」

「これから昼だね。一緒に食事でもどう?」

「……ひ、る……」

「もしかして弁当持ち? だったら弁当持ってきて。どっかで一緒に食おう」
弁当があると言って逃げようとしたのに、先回りされてしまった。

「いやあのでも、今の打ち合わせの内容を早く纏めて社長に報告を……」

「弁当ないってことね？　じゃ、行こうか。昼飯を食うぐらい岩淵さんも待てるでしょ。……あ、井口さん!!」

なぜか八子さんが、私を越えた向こうの通路を歩いていて井口さんに声をかけた。いきなり声をかけられた井口さんは、こちらを見て目を丸くしている。

「一時間ばかり鳥梯さん借りてくから!!　岩淵さんに聞かれたらそう言っておいて」「えっ!?　借りてくって……」

この人は何を言ってるんだと思いつながら井口さんの反応を窺う。すると彼女は無言で頭の上に両手を持っていき、そのまま大きな丸を作った。思いつきりOKのジェスチャーである。

——い、井口さん!!

彼女の反応を見た八子さんが満足そうに微笑んだ。

「これで文句ないだろ。じゃ、行こう」

「いやあの、ちよつと……!!」

八子さんが歩き出したのを見てから井口さんへ視線を移すと、微笑みながら手を振っていた。まるで私が八子さんに連れ出されるのを心から喜んでるように。

——いやいやいや、私は行きたくないんだって……!!

しかし、ここまできて、やっぱり無理なんて言えない。諦めの境地で、私は先を歩く

八子さんのあとをついていくのだった。

食事でもと言っていたが、どこへ行くつもりなのかも分からない。聞こうかどうか迷っている、八子さんがピタツと足を止め、こちらを振り返った。

「やっと二人になれた」

私を見る八子さんの表情は仕事中和違ふ。優しい微笑みは同じだけど、そこにほんの少し甘さが加わり、彼のファンが見たらその麗しさに悲鳴を上げそうな極上の笑み。

私もその微笑みの威力に負けそうになるけれど、なんとか理性で押しとどまった。

——うっ……ま、負けない……

「さっきも二人だったじゃないですか……」

「まあね、でも話したいことの半分も話せなかったからさ」

「話したいことってなんでしょうか」

「分かってるくせに。あ、足下に気を付けて」

普段下り慣れている会社の階段であろうと気遣ってくれる。八子さんのこういうところが、きっと女子に人気がある理由の一つなのだろう。

階段を下りきったところで、まだ行き先を聞いていなかったことを思い出す。

「それで、どこに行くんです?」

「ああ、とりあえず鳥梯さんを誘い出すことが目的だったから、何も考えてない」

「ええ」

てつきり当てがあるとはかり思っていたので、少し拍子^{ひょうし}抜けした。

「鳥梯さん、あんまり時間とれないだろう？ 近場^{ひょうし}でいいよ。なんなら一階のカフェでも」

このビルの一階には軽食を食べることができるカフェがある。平日は大概、正午を過ぎた辺りからオフィスに勤める社員がぞろぞろやってきて、十分もすればカフェはほぼ満席になってしまう。

まだ正午前だし、今ならたぶんまだ席には空^あきがある。

——じゃあ、そこでいい……いや、ダメだ。八子さんとの会話を知り合いに聞かれるのはまずい。

十中八九あの夜の話題なのに、知り合いがいつ来てもおかしくない場所で話すわけにはいかない。

「あの、別のところでもいいですか？ 近くにゆったり座れるカフェがあるので……」

「いいよどこでも」

この言い方だと、八子さんにとって場所は二の次らしい。あつさり承諾してもらえたので、とりあえずビルから出る。それにしても、二人きりで何を話すというのだろう。そのことが頭の中をぐるぐるしている。

——やだなあ……何言われるんだろう……

背中^{せなか}に重たい空気を背負ったまま、目的地に向かう。

会社から五分くらい歩いたところにある、別のオフィスビルの一階にある老舗^{らうせ}のカフェだ。

その店は路地を入ったところにあり、隠れ家のような趣^{おもむき}がある。そのせいもあってか、若い人よりも年配の人に人気がある。

最初は私も知らなかったのだが、上司に教えてもらってからたまに利用するようになった。

でもこの時間帯はどこも混み合っているはず。もしかしたら座れない可能性だってある。そのために他の候補も考えておかねば。

「もし空^すいてなかったら別の店にしますね、すみません。私の都合に付き合っていただいて」

「いーよいーよ、どこだって。それよりも鳥梯さん」

「はっ、はい」

「そろそろ気になっていること聞いてもいいかな。まだダメ？」
はつきり言われてしまい、ひゅつと喉^{のど}が鳴りそうになった。

——ダメ……じゃない、私もいろいろ聞きたいことはある、んだけど……

今私達が歩いているのは、ビルを出て人がまばらになってきた回り。ここまで来れば私達の会話を聞かれて困る人も、いないだろう。

「……いいですよ、どうぞ」

承諾したら、八子さんが歩きながら私を見下ろしてくる。

「……八子さん？」

「鳥梯さん、俺のこと避けてない？　もしかして俺、嫌われた？」

「ええ？　き……嫌ってはいないですよ」

「てはいない、というのは、どういう意味？」

私の返事で八子さんの眉間に深い皺が刻まれてしまった。

——いけない、変な言い方しちゃった。

「嫌いじゃないです！　そうではなくて……ちょっと、あの、どう接していいか分からなくなっているというか……避けているように見えたのならすみませんでした」

この言い方で分かってもらえるだろうか。

相手の反応を窺うと、一応納得してくれたのか彼の眉間の皺が消えた。

「まあ……それなら理解できるか。なんか、打ち合わせ中も鳥梯さん、俺とあんまり目を合わせてくれなかったからさ」

「……すみませんでした……でも、八子さんにも責任があるんですよ？」

「え。俺？」

素で驚いているところを見ると、まったく自覚はないらしい。

私だってそんなあからさまな態度をとるつもりはなかった。でも、八子さんが私の方ばかり見るのがいけない。あれじゃ他の社員に関係を怪しまれてしまう。バレないためにはそうせざるを得なかったのだ。

「打ち合わせの最中、こっちばかり見てきたでしょ……！　なのに私も八子さんの顔ばかり見てたら他の人に仲を怪しまれるじゃないですか。だから八子さんの顔をあまり見ないようにしてたんですよ」

「見ないようにつて、ひどいな。あの案件の責任者は鳥梯さんでしょう。責任者と視線を合わせるのなんか普通じゃない？　そもそも、なんで怪しまれたらダメなの？」

真顔で聞かれて、一瞬言葉に詰まってしまった。

ちなみに、勤務先はわりと自由な社風だ。社内恋愛も問題ない。でも、取引先の関係者との恋愛となると話は別だと思う。もちろん会社で禁じられているわけじゃないけれど、公と私の区別ははっきりつけた方が仕事もやりやすい……と、私は考えている。

「……ダメっていうか……あ、ちょっとこの話ストップで。着きました」

話している間に目的地のカフェに到着。ガラスのドアを開けて中に入ると、カウンターにいたマスターが「いらっしやい」と声をかけてくれた。

マスターはおそらく五十代後半から六十代くらい。この店の軽食は、全てこのマスターが作っているのだという。

二人です、と言う前に空^あいてる席へどうぞ、と案内された。見れば、まだカウンターの窓側のボックス席にも空^あきがある。

「ボックス席でもいいですか？」

「いいよ」

座席はレトロなペンダントライトが天井からぶら下がり、椅子はワインレッドのフェイクレザーで、木目の美しいライトブラウンの木製テーブルが備え付けられている。BGMにはジャズが流れ、インテリアとの相乗効果でよりいっそうレトロな空間を演出していた。

一杯のコーヒーとお気に入りの文庫本があれば、半日くらいここで過ごせそう。特に大人、とりわけお一人様にとっては非常に居心地のいい場所だと思う。

席に着くと、八子さんはまず、運ばれてきた水に口をつける。

「先に注文しちゃいましょう。軽食のおすすめはマスター手作りの厚焼き玉子サンドです」

メニューを広げて写真を指さすと、腕を組んだ八子さんが興味深そうに身を乗り出してきた。

「へー、旨そう。じゃあ、俺はそれで」

「私はカフェラテでいいかな」

「……ん？ 鳥梯さん飯、食わないの？」

さらっと注文を済ませようとしたのに、気付かれてしまった。

はつきり言おう。八子さんがいると食欲が湧かないのだ。

「あんまりお腹空^すいてないんで……飲み物だけでいいです。あ、注文お願いします」

八子さんに何か言われる前にアルバイトの女性を呼んだ。八子さんの軽食とブレンド、私のカフェラテを注文し、改めて八子さんと向き合う。

「……さて」

じっとこちらを見ながら、八子さんが微笑んだ。

「あの夜以来だね」

「その節は、すみませんでした!!」

とりあえず、八子さんと二人きりになったら謝ろうと決めていた。だからテーブルにくっついてしまいそうなほど頭を下げて謝った。

何に対して謝っているのか、我ながら説明が難しい。でも、あの翌日から、次に八子さんに会ったら謝らなくてはいけないような気がしていた。

そんな私の謝罪を受けた八子さんは、案の定というかやはりというか、目を丸くして

いる。

「なんで俺、謝られてるの？」

——まあ、そうか……そうなるよね……

体勢を戻し、前髪を直してから呼吸を整えた。

「あの夜のことでその、いろいろ、ご迷惑をおかけしたのではないかと……。正直、私、途中からあんまり記憶がなくて。あ、もちろんタクシーに乗ってからの記憶ははっきりしてるんですけど」

「別に謝るようなことは何もなかったよ。それよりも謝るのはこっちでしょ。ごめんね、いきなりあんなことして」

謝ってくれたことが意外だった。顔はそんなに申し訳なさそうではないけど。

——謝るっていうことは……やっぱり、あの夜のことは遊びだよ、って言いたいんだよね……？

「まあ、はい……びっくりしました」

「腰も痛めちゃったしね」

——それを言うか。

リアルにあの夜のことを言及してくるので、ドキッとした。

「……二晩くらいで良くなりましたから、どうぞお気になさらず」

立ち読みサンプル はここまで

「それは何より」

八子さんはここで一旦会話を切った。すぐにやってきた女性スタッフが、彼と私の前に注文したブレンドとカフェラテを置いていったからだ。

女性が去ってから二人とも無言でカップに口をつけた。いつもならコーヒーのいい香りとその美味しさにため息が漏れるはずなのに、今日に限ってはため息も出ない。

——……あ、味がしない……

久しぶりにめちゃくちゃ緊張してる。こんなの転職の時の面接以来ではないか。

「鳥梯さんは、なんであの夜、OKしてくれたの？」

「えっ……」

先にカップをソーサーに戻した八子さんが、じっと私の返事を待っている。

「それは……な、流れと言いますか。ふ、雰囲気と言いますか」

「雰囲気か」

八子さんが口元に手を当て、窓の外を見る。何やらあの夜のことを思っているようにも見えた。

「鳥梯さんは、ああいう雰囲気に弱いつてことなのかな？」

「そ……そういうわけではないですけど。でも、あの夜は食事会も楽しかったし、お酒も入ってすごく気分が良かったんです。その流れでああったので、私としてはもう仕